



## 会長メッセージ

ここメキシコシティに2回目の赴任をしてきたのは2009年12月。当時の印象は、かつては酷かった大気汚染が大分改善されたと感じる程度であった。人口1億2千万、多数の世界遺産を有し、そして世界第10位の産油国であるこの豊かな資源国の姿は、高いポテンシャルを秘めたサッカーメキシコ代表チームと重なるものがあった。

しかし最近では、自動車メーカーの進出ラッシュ、また規制改革を通じた資源・エネルギー分野への民間資本参入機運といったメキシコへの注目度の高まりが、日々実感できる水準まで到達した。「眠れる獅子がついに立ったか」という思いだ。まさかのプレーオフで予選通過したサッカー代表には、ブラジルW杯での活躍も期待できそうだ。

経済の高まりは新たな人を呼ぶ。若手を中心とした会員増加で当会も息を吹き返した。これまで活動基盤の再生のためにご尽力くださった田村健司前々会長(1981年商学)、永目哲前会長(1991年商学)に、この場をお借りしてお礼を申し上げたい。

活動は年2回の定例会に加え、三田会との威信と尊厳をかけたゴルフ早慶戦などもあり、良きライバルとの絆を深めている。今後ますます注目度が高まるであろうここメキシコで会員同士が親睦を深め、そして切磋琢磨できる場を提供できるよう尽力していきたい。

太田良平(1999年法学)



世界遺産 テオティワカン太陽のピラミッド

## メキシコ稲門会の人びと

## 会員からのメッセージ

●2010年12月に赴任してきました。今まで家族とともにサウジアラビア、シンガポール、上海と海外赴任を経験しましたが、今回は最初から最後まで単身赴任。寂しさを紛らわそうと中学時代から自己流で始めたギターを持って赴任しました。

約40年間当地に在住の日本人にホームパーティーに招かれたとき、学生時代からビッグバンドなどで本格的にドラムとサクスを演奏してきた赴任者お2

人と知り合う機会に恵まれました。そのパーティーの主催者の奥様もキーボードを演奏される方で、後日バンドでの演奏をお願いしたところ、ご快諾くださいました。その後もボーカル、ベース、キーボード、サククス、トロンボーン、トランペットと仲間が増え、2012年10月には私にとって初めてのバンド「親父バンド、Don Tacos y Amigos」を結成。日墨協会主催のクリスマスチャリティーコンサート、メキシコ日本商工会議所主催の新年会などにも出演し、日墨友好の一環として、演歌からジャズまで多彩な音楽を楽しんでいます。

西川昌幸(1978年政経)

●2012年秋よりメキシコの独立系電力会社に勤務しており、メキシコシティで暮らしています。会社の上司が前会長であったこともあり、異動直後に入会し、さまざまな校友の方と知り合うことができました。会員には長くメキシコに住み活躍されている方、JICA海外協力の方、私のような日本企業の駐在員など、さまざまな立場と経験をされてきた方が多数いらっしゃいます。定期総会やゴルフなどのイベントを通じてそうした方々と交流することができ、いつも刺激をもらっています。これからも稲門会を通してメキシコのことを知り、そしてさらに好きになり、メキシコ社会によりいっそう貢献していきたいと考えています。

丸山祐輝(2007年理工)



在住30年あまりの私でも衝撃を受けてしまう出来事・トップ5をご紹介します。メキシコがどんな国なのか、きっとリアルに伝わるはず。

## メキシコでの衝撃

Shock

【その1】大勢の貧困層がいる一方、世界長者番付のトップもメキシコ人という不思議。

【その2】疲弊した農村地帯から若者が貨物列車の屋根に飛び乗り無賃乗車で国境まで行き、砂漠地帯を横断してアメリカを目指す。しかし、命を落とす者多数。

【その3】共同墓地(?)。マフィア間の抗争で殺害された遺体隠しの大穴が、ときどき発見される。

【その4】公務員、公立病院、メキシコ石油公社、国立大の一般職、公立小中学校の教師のポストなどが売買できる。かつ、親がそのポストに就いていると世襲でき、ポストも給料も終身保障。その結果、勤労意欲減退気味。

【その5】地方の公立小中学校教師が大型バ



スで首都メキシコシティに押しかけ、目抜き通りを占拠。テントを張って長期間泊まり込む。時に、教師の威信をかけ(?)一糸まとわぬ産まれたままの姿で円陣を組む(但し女教師を除く)。これは、コンパの隠し芸ではない。レッキとした抗議行動なのである!

こういうことが起きる原因は一つ。征服した者と征服された者の国家で、下克上はなかったからである。貧困層はアメリカを目指すか、大都市でマフィア労働者になり、命を落とす。もし、いったん公職に就けたら、その権利を手放すまいと信じ難い抗議行動に出る。

しかし、最も驚かされるのは生活苦の中の明るさだ。貧困の平等、そしてストレスのかかる上昇志向をせず、苦しくても楽しさを見つける才能にあるらしい。豊かな日本では鬱病や自殺が多いと知ったら、彼らはさぞビックリすることでしょう。

田中都紀代(1971年文学)

## メキシコ稲門会について

About

当会は1975年、当時NECメキシコ社長だった細川重一氏(1952年商学)の音頭で誕生した。発会式はレストラン・サントリーで催され、約20名が集まった。

「都の西北」を歌い始めると、ほかの客席からも「私も稲門だ」という人が数人、仲間に加わった。メキシコ人も箸を振りながら「ワセダ、ワセダ」と調子を取り始め、その夜の店内は早稲田一色に染まった。

メキシコの在留邦人には稲門が多く、早稲田から講義録を取り寄せて勉強したりもしていた。100年前、グアテマラ国境近くの片田舎で初めて電気を起こしたのも稲門だ。さらには1910年のメキシコ革命時、「早稲田大学医学部卒」を名乗る軍医もいたという。その後、そろばん普及や仏教伝道に力を注ぐ人も出たりして、メキシコにおける早稲田の層は厚い。会員数は現在、約40名である。

荻野正蔵(1970年教育)

## メキシコ稲門会ゴルフチーム

一昨年、久々に再開を果たした早慶戦では破竹の3連勝を収め、三田会は意気消沈気味である。そもそもエンジのユニフォームに白とエンジの帽子、さらには校章入りの公式ボールまで揃え、しかもすべて本部キャンパス内の生協で直に購入するという気合の入りがよい。簡単に負ける気はない。技術以前に心意気で勝負あった、というところだ。

勝利を支えるため、皆のユニフォームを早稲田の杜からメキシコまでハンドキャリーしてくださった中野行庸前幹事長(1991年人科)に心から感謝したい。連勝記録を伸ばせるよう、今後は技術面を中心に研鑽に励んでいく。

富田実(1991年商学)

